人物往来

わが心の自叙伝

竹本成徳（高2回）

竹本成徳（たけもと・しげのり）氏の略歴

元コープこうべ理事長。1931年広島市生まれ。44年修道中学校入学。45年広島市役所南側植込みで被爆。54年同志社大学卒業。同大大学院に進学。同大学生協専務理事に就任。

57年神戸生活協同組合に就職。神戸生協と灘生協の合併後、専務理事を経て89年灘神戸生協（現・コープこうべ）組合理事。93年から2001年までコープこうべ理事長。

阪神・淡路大震災後には陣頭指揮を執る。93年から2003年まで日本生活協同組合連合会会長。03年勲二等瑞宝章受章。神戸市在住。

「わが心の自叙伝」は、神戸新聞に全30回（2010年3月21日から10月10日までの毎週日曜日）にわたって連載されたものです。竹本氏は、この自叙伝を書かれるにあったって次のように述べられています。「正直に言って、大変とまどいました。「わが心の自叙伝」と聞いて、私には不似合いなテーマであると考えたからです。できることなら辞退したい。それにしても、編集担当者と一度お目にかかって、よくお聞きした上でのことにしようと面会を要請し、お会いしました。先方は私がヒロシマの原爆で奇跡的に生き残り、今では爆心地より1キロ以内では、百人に一人しか生存していない被爆者の一人であり、その上、阪神淡路大震災でも大きな試練をくぐり抜け、二度の地獄を見たという希有の体験の持ち主であること。そして、生協一筋の人生をこの地、神戸で歩んできた事などを、依頼の理由に挙げられました。こう説明されると、逃げるわけにはいかなくなりました。以下略　」

この度、ご同期の中村和彦氏より是非ご紹介いただきたいとのご依頼を受けて、特に修道中学校入学からご卒業までの「戦争末期」「8月6日」「炎の外へ」「友の記憶」「姉の介抱」「姉の死」「青春時代」「被爆を語る」の8編を掲載させていただくことといたしました。

（事務局）

神戸新聞　2010年４月11日(日)掲載

わが心の自叙伝

竹本敏徳

▷4

戦争末期

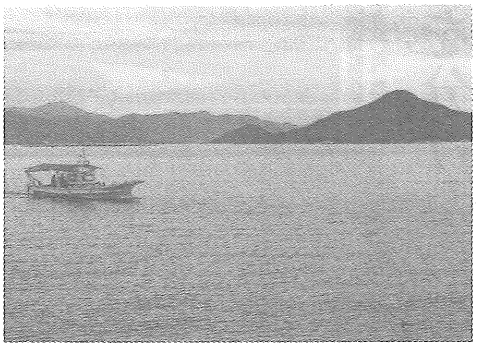
意味深な紙片見つける

神戸新聞
2010年４月11日(日)

1944（昭和19）年4月、私立修道中学校に入学した。私のように広島市の郊外に住む生徒も電車通学は許されず、体を鍛えるため、片道50分の徒歩通学であった。引率の4年生や5年生の先輩は、きりっとしていて大人のようだったが、その上級生も次第に減っていった。軍需工場に派遣されたのだ。入学当時は「敵性語」と言われた英語の授業もあり、特段、普通のカリキュラムと変わることはないように思えたが、軍人勅諭や教練教科書といった書物にも目を通す時代へと進んでいった。

戦局の逼迫に伴って、敵機の飛来が増えてきた。米軍はグアムやテニアンなど太平洋上に浮かぶ島を基地とし、B29という長距離を飛べる戦略爆撃機によって本土爆撃ができるようになっていた。終戦を迎える45年には、3月10日の東京大空襲をはじめ、名古屋、大阪、神戸の街が焼夷弾で焼き尽くされ、多くの死者を出した。一方、高度7千～8千㍍の上空でキラキラと輝くB29が2、3機で広島上空を通過することは度々あったが、爆撃はなかった。それが、私にとっては不思議ならなかった。

ある朝、目を覚ますとすぐに「西部軍管区司令部発表。本日未明、土佐湾南方海上に敵空母現わる。続いて、敵機は土佐湾を北上し、四国を横断。伊予灘から広島湾上空に向かって航行中…」とラジオの放送が流れた。海岸から近いわが家からは、向かって左に能美島、似島、その後ろに海軍兵学校のある江田島、そして右に宮島と、広島湾が一望できた。その島と島の間から、敵の艦載機が6、7機編隊で次から次へとやってくる。街中のサイレンは一斉に空襲警報を鳴らす。敵機の黒い固まりが、広島の市街地にかかる直前、東南方向に旋回し、1番機から次々に急降下して呉の軍港に突っ込んでいく。爆弾を投下し終えると、急上昇して南に帰る。



現在は平和な風景が広がる広島湾。右は、その形から「安芸小富士」とも呼ばれる似島＝広島市西区

軍港の艦船からの迎撃はもちろんのこと、周りの島々に構築された要塞から、一斉に発せられた対空砲火で見る見るうちに空は黒い弾幕で包まれる。その中に敵機が突っ込んでいく。ほとんどは命中しないが、時々、火の玉となって散っていく。任務を果たした敵機は、南の洋上で待つ空母に帰っていった。それは、戦争映画さながらの光景であった。

私たちは少年のころから「ひきょうで臆病者の米兵」と教え込まれていたが、こうした様子を見ていると、それは真っ赤なうそだった。戦争は、そのように危険からの逃げ場を与えるものではない。人間は、いざ命をかける場面に直面すると、すごい意志と力を奮い起こし、勇敢で強くなるものだと思った。これは不条理な心理だろうか。終戦の年の春から、こんな光景が続いた。

ある日、潮干狩りをしていたところ、変なものを見つけた。手のひらの2倍ぐらいの大きさの紙に日本地図が描かれ、その真ん中、広島の辺りに太字で「？」と書かれていた。その紙は、干潟のあちこちに散らばっていた。その場では「どうせ、アメリカが不安と厭気分をかき立てるためにまいた宣伝ビラだろう」と感じ、それ以上の深読みはできなかった。今になれば、原爆投下地点としての広島を暗示するものではなかったろうか、とも考える。

こうして、時は一刻一刻と、その日に近づいていった。

（たけもと・しげのり＝元コープこうべ理事長）

神戸新聞　2010年4月18日(日)掲載

わが心の自叙伝

竹本成德

▷5

神戸新聞
2010年4月18日(日)

8月6日

運命を分けた白い包帯

1945(昭和20)年8月6日午前8時15分。1発の原子爆弾によって、広島の街は一瞬にして廃墟と化した。その瞬間、私は爆心地からわずか1キロの、広島市役所の西側にある植え込みの中にいた。

「ピカッ、ドォーン」とものすごい光と音がしたかと思うと、回りは一瞬のうちに真っ暗になってしまった。その暗闇の中を逃げ惑う途中、死んだ人、大やけどをした人を数えきれないほど見た。がれきの下のうめき声も聞いた。今でもその声が耳の奥によみがえることがある。

原爆の記録はたくさんあるが、なおも私が話しておかなければならないと考えたのは、私のヒロシマを、私自身の「ことば」で語らなければならない。私の「こころ」で語らなければならないと思ったからである。

8月6日、広島は朝から抜けるような青空であった。修道中学校2年生の約150人は家屋疎開(街の周囲に防火帯を造るため、強制的に家を取り壊し、その廃材を運ぶ作業)に動員されていた。ほかにも多くの中学生、女学生、一般市民が参加し、市内には普段よりもたくさんの人が出ていた。

午前7時50分に広島市役所の西側に集合するため、私は白の半袖シャツに国防色の上下、足にゲートルを巻き、わら草履で家を出た。左の足には白い包帯を巻いていた。前日の夕方、壊された家の廃材を風呂の焚きつけにするため、近所に隠した姉と取りに行き、大八車にいっぱい積んで帰ろうとしたときにくぎを踏みつけた。大したケガではなかったが、ばい菌が入らないようにと思って包帯をした。

点呼が終わると、市役所東南の雑魚場町の作業現場に向かって行進した。数百メートル歩いたところで、3組の担任だった岩崎幸喜先生が私を呼び止め、「竹本、君は弁当の番をするために市役所へ帰ってくれ」と言われた。

「みんなと一緒に作業をする方がおもしろいのにな」と思ったが、命令なので、私は隊列を離れ、市役所へ戻った。

先生は、私の足に巻かれた包帯を見て、作業はできないと思われたのかもしれない。大げさに包帯を巻いて来たことを「しまった」と思った。後になって、死へ向かう行進から「帰れ」と命令された岩崎先生の顔が思い浮かぶ。合掌。

市役所に戻ると、西側の日陰になった植え込みの中にみんなの弁当と上着が置いてあった。同じクラスの斎藤陽二君が弁当の番をしており、甲人勅諭や教練教科書の暗唱がどれだけできるか、確かめ合うことにした。

「さぁ、始めようか」と声を掛けたところで、突然、「ピカッ、ドォーン」という、ものすごい光と音がした。それに、焼き殺されるような熱さだ。

「うわァー!」。何が起こったのか、さっぱり分からない。少し離れた所にある広島ガスのガスタンクが爆発したのだろうか、とも思った。思わず両手で目と耳をふさぎ、植え込みの中で伏せていた。

意識を失っていたようで、どのくらい時間がたったのか分からなかったが、目を開けると真っ暗だった。あの青空がない。夢を見ているのではないかと頬をつねったが夢ではない。子どものころ、町の写真店で、ストロボの代わりにマグネシウムが焚かれて飛いた。その炎を数万倍にしたような光だった。光も音も熱さも、ものすごいというほかに名状しがたいものであった。

原爆投下後、一面焼け野原となった広島の市街地。右の建物は原爆ドーム（広島平和記念資料館提供、川本俊雄さん撮影）

(たけもと・しげのり＝元コープこうべ理事長)

神戸新聞　2010年４月25日(日)掲載

わが心の自叙伝

竹本成德

……▷6

炎の外へ

暗闇の中、必死で逃げた

神戸新聞
2010年４月25日(日)

それからどこをどう歩いたか、覚えていない。しばらくすると、私はまた広島市役所の玄関に戻っていた。辺りはまた暗闇である。玄関には、「ウオーッ、ウオーッ」と悲鳴にならない悲鳴を上げ、大勢の人が集まっていた。「やられたァー、やられたァー」と叫ぶ声が聞こえた。

2人の若い女の人がやって来て、呆然としていた私の体を揺さぶり、「私たちはケガをしていますか」と尋ねた。見ると、顔も体も至る所にガラスの破片が突き刺さって、たらたらと血が流れている。しかし、暗いので血が赤くは見えない。「大変なケガをしている」と答えると、「私たちはもうだめよ」と言いながら、人ごみの中に消えてしまった。2人の女の人だけでなく、回りにいた人はみんな、体中にガラスの破片が突き刺さっていた。

小さな男の子を連れたおばあさんがいた。男の子の手をしっかりと握っていたが、やがて「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と拝み始めた。私も思わず一神様ァ、助けてください。僕は今から逃げますから」と手を合わせて祈った。

市役所の前は市電通りだった。市電の線路の東北には西練兵場がある。そこまで行けば広い原っぱがあり、助かると思った。途中、市電の袋町停留所前に日本銀行広島支店がある。そこに勤める姉を助けて一緒に逃げようとしたが、しばらく進むと行く手に火の手が上がって、あきらめなければならなかった。

しかし暗闇の中、逃げる道が見つからない。倒れた家が道をふさいでいるのだ。南に向かって、家の屋根づたいに逃げるしかなかった。下から「助けてくれー。助けてくれー」とうめくような叫び声がするが、どうすることもできない。後ろ髪を引かれながら逃げて行く。

原爆投下後の広島市役所。筆者はこの建物の右側にいた
（広島平和記念資料館提供、川本俊雄さん撮影）

建物を取り壊した空き地に出ると、2人の中学生が「助けてください。連れて逃げてください」とやって来た。山陽中学校の1年生という。真っ裸だ。両手の皮膚が、ボロぞうきんのように垂れ下がっている。手を下ろすと痛いのか、両手を上げたまま幽霊のような格好をしている。一緒に逃げて行くと、女学生の一群とぶつかった。60人から70人はいただろうか。真っ裸で頭髪は焼け縮れ、皮膚は垂れ下がって、みんな幽霊のようであった。背後に火の手があるので、こちらに向かったのであろう。

この時に一瞬、私も迷った。もう一度、元の方向に戻ろうか？　いや、それは市の中心部に戻ることになり、最終的には袋のねずみとなって焼き殺される。私のクラスの級長であった徳富修君は「真の空襲の大きな教訓は、一刻も早く火をくぐり抜けて街の外に出ることだ」と強く教えてくれていた。それを肝に銘じていたので、私は女学生の一群を突き切って、なおも南の方へ逃げた。火の手が近づくと、2人の中学生は「熱い熱い、痛い痛い」と泣き出した。

その時、燃え盛る火の中から女の人が飛び出して来た。「お願い、どうか助けて。子どもが火の中で焼け死ぬの」と、私の袖をつかんで離さない。私は本当に苦しかった。しかし、このままでは自分も焼け死ぬ。心の中で「お母さん、すみません。許してください」と謝って、その手を振り切ってしまった。今も、心に焼きついて離れない。

（たけもと・しげのり＝元コープこうべ理事長）

神戸新聞　2010年5月2日(日)掲載

わが心の自叙伝

竹本盛徳

……▷7

友の記憶

変わり果てた姿、そして…

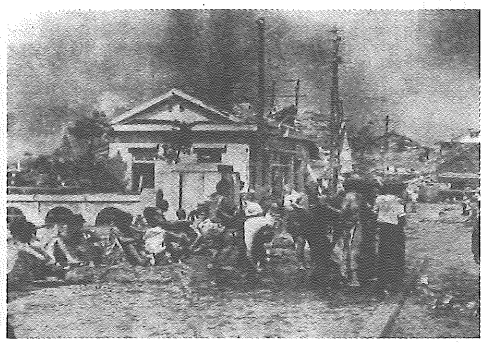
少し明るくなってきたころ、道端の手押しポンプで顔の血を洗っている男の人から「ポンプを押してくれんか」と頼まれた。押しながら上から見ると、頭は割れ、半分がずれていた。

（広島市役所から東に約1キロの）比治山橋に差し掛かって、初めて後ろを振り返った。赤、黒、青、黄と何とも言えない異様な色をした雲が、むくむくと天を突いている。あたかも地からわき出ているようだった。「はぁ、あの雲の下にいたから真っ暗闇だったのだ」とようやく気がついた。橋の欄干から下を見ると、逃げ場を求め、水を求めて大勢の人たちが川に下りていく。人が川にのみ込まれていくようだった。

比治山のふもとの市電通りは、人と車でごった返していた。乳飲み子を抱えて道端にへたり込むお母さん。大やけどをした市民や兵隊さん。無傷の人はいなかった。

その後も機銃掃射が続き、私は怖くて、防空壕に入ったり出たりしながら修道中学校近くの御幸橋までやって来た。学校に立ち寄ると、2階建ての木造校舎は全壊していた。寄宿舎は跡形もなく、鉄筋の小さな建物1棟だけが残っていた。学校は爆心地から約2・5キロ。小早川君という生徒が机と梁に挟まれて圧死していたが、怖くて近づけない。校庭に人影はなく、午後3時すぎの太陽に照りつけられた運動場は白く静かであった。

草津浜町（現広島市西区）のわが家に帰るには途中、いくつかの川を越えなければならない。対岸に江波町が見える川岸まで来たとき、「竹本、竹本！」と声がした。探していると、私の左に仁王立ちの男がいる。真っ裸で体全体が赤く腫れ、顔も2倍くらいに膨れ上がっている。「君は誰や！」と聞き返すと「川端や」と答えた。教室では私の後ろの席で、今朝も一緒にいた。その川端君が、見るも無残な姿に変わり果てていた。



爆心地から2.2キロの御幸橋。原爆投下の約3時間後に撮影され、直後の惨状をつぶさに伝える（中国新聞社提供、1946年7月6日掲載）

「川端、しっかりせい」と肩を貸し、川を渡って近くの桝本伸之君の家に連れて行った。お母さんと女学校4年生のお姉さんがいて、「伸之は全身大やけどをしているので、江波の陸軍病院へ連れて行った」と言われた。そこで、お姉さんに手伝ってもらって川端君をリヤカーに乗せ、急いで病院に向かった。

近づくと、道という道の両側に人が横たわっている。筵や戸板に寝ている人はほとんどいない。多くはアスファルトの上にじかに寝ている。目を開けたまま死んでいる人、今が断末魔か、水をください と拝むように哀願する人、みんな裸だ。体も顔も膨れ上がり、血や体液でびかびかに光っている。

枕元に「○○町・○○さん」と書かれた瓦や木片が置かれた人がいた。ものが言える間に聞き取らないと、誰が誰か分からなくなる。中には、裸体に直接名前が書かれた人もいた。その中をかきわけるようにして、病院までたどり着いた。広い中庭も、今朝の市役所前と同じ状況であった。人がもみ合い、飛び交う悲鳴に包まれていた。

私の記憶は、ここでぷっつりと切れてしまっている。終戦の翌年の慰霊祭では、川端君のご両親に「病院までは間違いなく私が連れて行きました。しかし…」と苦しい報告をした。だが最後に川端君を、どなたかどうやって託したのか。兵隊さんか看護婦さんか、ほかの救護者にお願いしたのか。今日までその記憶を手繰り寄せることができず、苦しんでいる。

（たけもと・しげのり＝元コープこうべ理事長）

神戸新聞
2010年5月2日(日)

神戸新聞　2010年5月9日(日)掲載

わが心の自叙伝

竹本成徳

▷8

姉の介抱

太田川放水路を渡り、国道2号に出た。あと約4㌔西へ歩けば、草津浜町（現広島市西区）のわが家に帰れる。私は力を振り絞って歩いていった。

国道2号は郊外に逃げる人や車、逆に救助で市街地に向かう人でいっぱいだった。日は西に傾いていたが、まだ明るかった。西に向かう人波に押されるように歩いていたら、向こうから「成徳、成徳」と叫ぶ声がした。父だ！　自転車に乗って手を振っている。父は「お前、生きとったかぁ。お前は死んどると思っとった」と驚いた様子だった。

町内会長をしていた父は、朝から草津小学校で救護に当たっていた。次々と情報が入る中、修道中学校2年生がいた市役所方面は全滅と聞かされ、私の命はあきらめていたのだった。「わしは今から（私の姉の）冷子を助けに行く。お前はリヤカーに布団を敷いて、ここで待っておれ」と言い残して、街へ入っていった。

夜9時ごろ、父は爆心地から数百㍍の日本銀行広島支店の地下室にいた姉を救い出し、自転車の荷台に縛り付けて、私たちの待つ場所に戻ってきた。姉は紙屋町交差点を走っていた市電の中で被爆し、気を失って倒れていたが、黒い雨に打たれて自を覚ましたという。少し歩いては倒れ、なんとか日赤にたどり着き、地下室にいたそうだ。自転車に乗せられて帰る途中も何度か「お父さん、もうしんどい、もうだめ、降ろしてちょうだい」と頼んだが、父はそれを聞かなかった。いっそう、ひもをきつく締めたと、後になって言っていた。

父から姉を引き取ってリヤカーに乗せ、必死で引いて帰り、仏間のある座敷に寝かせた。姉が「おしっこがしたい」と言い出したので、私はおまるで取ればよいと勧めたが聞かない。どうしても言うので、姉を抱えるようにして便所に連れていき、用を足して出ようとしたときである。廊下を挟んで向かい側の脱衣場に、母が生前愛用した大きな姿見があり、その鏡に私が抱えた姉の姿が映ったのだ。

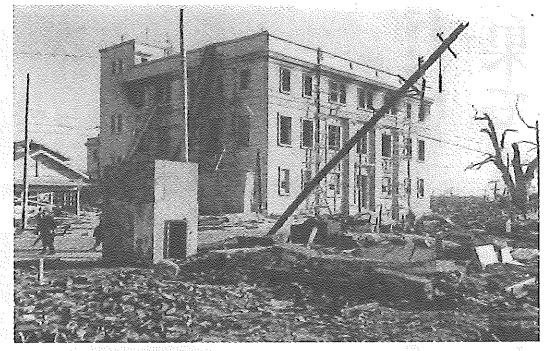
全身大やけど。顔も赤黒く焼けただれ、目ばかりが光る。頭には2カ所の穴があった。姉は「あァー、もう生きとってもつまらん。生きとってもつまらん。人間の顔をしとらん」と泣き出した。しまった、うかつだった。すまんことをした。見せてはならないものを見せてしまった。もうどうすることもできない。

私は激しい自責の念に襲われた。

一晩中、姉の介抱に当たったが、薬が手に入らない。やけどには油がいいと言われていたので、膏薬や赤チンと手当たりしだい塗ってやる以外に道はなかった。姉は「水をちょうだい、水をちょうだい」とせがんだが、水を飲ませると死ぬと言われていたので、我慢しようね、苦しいけど我慢しようねと、水を含ませた脱脂綿で唇を湿らせてやることが精いっぱいだった。

父は娘の看護と小学校での救護活動との板挟みになって、家と学校との間を何度も往復していた。小学校では多くの被災者が「水をください」と叫んでいた。父は、人々が水を飲もうが飲むまいが、どんどん死んでいく様を目のあたりにしながら、徹夜で救護に当たっていた。

（たけもと・しげのり＝元コープこうべ理事長）



原爆投下後の日本銀行広島支店。筆者の姉はこの地下室にいた（広島平和記念資料館提供、川本俊雄さん撮影）

「人間の顔をしとらん」

神戸新聞
2010年5月9日(日)

神戸新聞　2010年5月16日(日)掲載

わが心の自叙伝

竹本城徳

▷9

神戸新聞
2010年5月16日(日)

姉の死

原爆投下から一夜明けた8月7日の朝5時ごろ、父は徹夜の救護から帰ってきた。台所の板の間にあぐらをかき、無言のまま一点を見つめていた。

突然、正座し直したかと思うと、父は大きな声で私を呼び、「成徳、裏の畑に行ってトマトをもいで来い」と命じた。父にトマトを渡すと、包丁で切り、ぎゅうと絞って搾った。そして「冷子はのぉ、トマトの好きな子だったからのう」と独り言を言いながら、姉の枕元に行って飲ませた。「お父さん、ありがとう、ありがとう。おいしい」と、姉はのどを鳴らして飲み干した。

小康を得たので、父はまた小学校に行った。午前9時ごろになって姉が「お父さん、お父さん」と言い始めた。この場にいない父を呼び続けるのは、意識がもうろうとしているのではと思った。続いて「もう少ししたら、お母さんが迎えに来てくれる。お父さん、先立つ不幸を許してください」と言ったとき、徹夜で枕元にいた祖父が「冷子、冷子。もし、わしが代わって死んでやれるもんなら、死んでやるのにのう」と泣きだした。私も「お姉さん、がんばれ。おれは絶対に海軍の飛行機乗りになって、アメリカに仇をとってやる。お姉さん」と呼び掛けた。

私から姉に贈る、最初で最後の言葉となった。午前9時40分、姉は静かに逝った。

棺桶はない。納屋から板切れを持ち出し、にわかごしらえの棺に姉を納め、みんなで山に行って穴を掘り、荼毘に付した。父は無言でマッチを擦り、火をつけた。姉はかわいそうだ。私は無念に思っていた。だが、20歳のわが子を自ら焼かなければならない父の気持ちはどうだったろう、一番つらいのは父ではなかったろうかと、自分が子を持って思う。

最後のトマト「おいしい」

広島市内の法雲寺で行われた修道中学校の原爆死没者の慰霊式。筆者は最前列右端で、生徒代表として弔辞を読んだ（1946年ごろ）

原爆投下から10日ほどたったころ、広島の街に出た。川面はまだ人と焼け落ちた木片で埋め尽くされていた。橋の上からその光景を眺めていたら、隣にいた夫婦が私に言った。「あの日から娘を捜してあらゆる所を歩いているが、出会えない」

そしてお父さんが川の中に入り、うつぶせになっている遺体を、わが子ではないだろうかと次々にひっくり返しておられた。だが遺体は腐乱が進み、ズルッと崩れていく。ああこれがこの世の光景か、むごい、残酷、悲惨。私は、子を思う親の愛と情念に心を動かされた。親にしかこんなことはできないと思った。

街の各所や寺の境内などに死体が山のように積み上げられ、防火用水は最後の水を求めた大勢の人で埋まり、馬も牛も目をむき、膨れ、どっかりと倒れていた。市電は焼けて転がり、街はがれきの山、見渡す限りの焦土と化し、人間の焼け焦げる異様なにおいに包まれていた。ヒロシマは破壊されたのではなく、焼かれたのでもない。私は、1発の原子爆弾によって〝消された〟ものだと思っている。

終戦を迎えた1945（昭和20）年だけで、広島の原爆のために約14万人が亡くなった。今日、平和記念公園の慰霊碑には犠牲者269394人の名簿が納められている。

「安らかに眠って下さい　過ちは　繰返しませぬから」

慰霊碑に刻まれた文面だ。これは、誰が誰に残した言葉だろうか。私は、人間が人類に、そして一人ひとりに向けて発した言葉だと思う。戦争という愚かな過ちを繰り返さない、と。

（たけもと・しげのり＝元コーブこうべ理事長）

神戸新聞　2010年5月23日(日)掲載

わが心の自叙伝

竹本成徳

▷10

青春時代

友人とバレーに打ち込む

神戸新聞
2010年5月23日(日)

1945（昭和20）年8月15日、戦争は終わった。平和と民主主義、スポーツが奨励される明るい時代を迎えた。

私は高校、大学とバレーボールに打ち込んだ。修道高校では、気の合った選中7人が中心となってバレー部を復活させた。初陣は広島市内の高校の総当たりリーグ戦であったが、1勝もできなかった。恥ずかしさと悔しさは忘れられない。

「よし、これからは上がるしかない。われわれの下には誰もいない」と、ゼロからの出発となった。休みのない猛練習、雨の日は教室の黒板で図上作戦。正月も返上、シーズン中の期末試験は合宿中の長束のお寺から登校した。毎日、暗くなるまで校庭にいた。帰途もみんながそろって市電の紙屋町で降り、「万よし」のアイスキャンディーを食べて帰るまでしゃべったものだ。それでもなお別れ難くて、お互いの家に2、3人で泊まり込むこともしばしばあった。翌朝は弁当を持たせてもらって学校へ行った。戦後の食料難時代で、ご家族は大変だったと思う。

私はキャプテンで、セッターをしていた。身長167㌢、体重60㌔で、9人制の時代だったので何とか務まったと思っている。対戦相手の得点が続き、そのペースを変えることのできない苦しさは、何のスポーツでも団体競技を経験した者には分かることだと思う。キャプテンとしての真価が問われるところだ。コーチ、監督の采配に助けられるところでもある。

2人のすばらしい先輩に指導を受けたことは、人生の宝となった。早稲田大に進まれた中吉奇治さんには、大きな声で気合を入れられた。星薬科大に入られた河野徹男先輩には、負けても「よしよし、また頑張ろう」と慰められ、励まされた。河野さんは思いやり深く、優しく、奥深く闘志を秘めた人だった。後年、長く広島スポーツ界の頂点に立ち、財団法人日本体育協会理事や国体委員長も務められたほど人望の厚い方であった。動と静、剛と柔の先輩から鍛えられたことは、本当に恵まれた幸運と深く感謝している。

修道高校バレー部のメンバーとともに。筆者は前列右

セッターだった私は、ずっと考え続けていたことがある。アタッカーは上げられたトスを見てジャンプし、打つものと思われているがそうではない。サーブレシーブをしたときのパスによって、どのようなフォーメーションをとるか瞬時に判断した上でジャンプし、私からのトスを待っている。私は、アタッカーのいるところへ思いを込めてボールを持っていく。世に言われる阿吽の呼吸がバレーの醍醐味であり、魅せられるところであると思う。

卒業のころには、国体の県予選で強豪・三次高校には負けたがいくつかの大会で入賞し、表彰されるまでになったことを、わが青春の喜びとしている。「成せば成る」の気概を得た。

大学では、私のバレーは通用しなかった。それでも好きだったから部活動は続けた。だが、とうとう関西学院大には勝てなかった。関学大のパック陣の合言葉は「100万分の1の可能性の追求」。取れないボールを取ることであった。

ボール拾いやコートの整備に明け暮れる名もなき多くの部員の上に、エースアタッカーはつくられる。エースなくして勝つことはできない。エースは要るのだ。その後の私の人生にとって、大切な哲学となった。

（たけもと・しげのり＝元コープこうべ理事長）

神戸新聞　2010年10月10日(日)掲載

わが心の自叙伝

竹本敏徳

▷30

神戸新聞
2010年10月10日(日)

被爆を語る

未来を信じ子どもたちへ

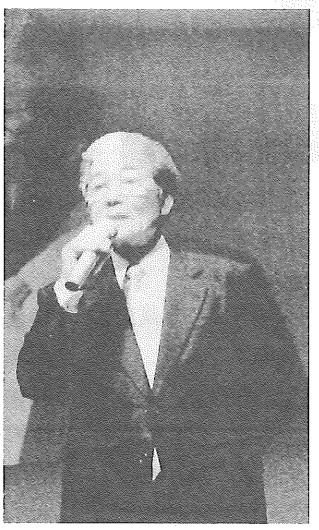
昨年に引き続いて8月6日、ヒロシマに行った。三つの目的があった。原爆投下の前日、全国の生協から集まった組合員親子千人に被爆体験を語ること。国連事務総長・潘基文氏も参加する「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」への公式参加。地元兵庫のサンテレビが企画した「兵庫に住むある被爆者の65年前のヒロシマ」をテーマにした取材であった。

式典には国連事務総長、米駐日大使ルース氏をはじめ核保有国である英、仏の代表も参加し、海外からの参加者は過去最多の74カ国となった。しめやかな中にも未来への希望をつなぐ明るい国際色が会場を包んだ。米大統領オバマ氏が「核兵器のない世界を目指す」と宣言してから、世界の潮流は大きく動きだし、核廃絶の悲願が実現する可能性を私たちに示したのではないだろうか。

原爆の日、終戦記念日と続く夏は、「平和」のシーズン。だが今年、マスコミの腰の入れ方は例年を大きく上回った。私にとってもこの夏は格別であった。講演、取材、ラジオ出演とスケジュールが立て込んだ。被爆体験をつづった「さいごのトマト」を、13年ぶりに再版したためだった。思わぬ方々から電話や手紙をちょうだいした。正直なところ、暑さでダウンしたらどうしようという不安もあったが、緊張感で乗り切った。

被爆体験を語る上で、いつも私を激励し、応援してくれたのは、多くの子どもたちであった。昨年末に届いた、ある6年生からの手紙を紹介したい。神戸市立桜が丘小学校からのお礼の手紙の一部だ。

「話を聞いて色々な思いが胸からこみ上がってきました。原爆を受けた方々の苦しみや悲しみがわかりました。竹本さんは爆心地から1キロの場所で助かってすごい、本当に奇跡だと思いました。『最後のトマト』という本をぜひ世の中に出してください。その本を通して日本や世界の人々に平和の大切さや感動をあたえられたらいいですね。竹本さんが体験した原爆はもう絶対に作ってほしくないです。核兵器反対!! 今日はありがとうございました。この話をむだにしません。平和のために僕たちができることを少しずつでもやっていきたいです」



全国の生協組合員が参加した「ピースアクション　in　ヒロシマ」で被爆体験を語る筆者＝2010年8月5日、広島市内

余白に赤いトマト2個と花びら、ハートが10個、色鉛筆で描かれていた。

子どもたちは輝く目でじっとこちらを見て、話を聞いてくれた。その顔を思い浮かべながら、丹念に手紙を読んだ。私は胸が熱くなり、涙がこぼれた。みんな、みんな、ありがとう。一生懸命書いてくれたね。頑張ってこの手紙に応えたいという思いから、「さいごのトマト」の再版は実現した。

風化という言葉がある。時間の経過で避けられない面もあるが、ヒロシマを知ることで人間の痛みがわかる心を持つことができる。それが平和の原点になると思う。子どもたちは、できることを一つずつやりたいと言っている。すばらしい継承だと思う。

核廃絶は容易ではない。しかしその可能性に向かって人類は努力すべきだ。潘氏は被爆地訪問について「平和のためにやって来た」と語った。次の言葉を結びとしたい。

〝未来を信じよう
理念のあるところだけ
人間は努力をする〟

(たけもと・しげのり＝元コープこうべ理事長)

◇

来週からの筆者は、作家の陳舜臣さんです。

人物往来

音戸温泉湧く興味
～東海大講師、聞き取り調査～

新田　時也氏（高校34回）

「都会の真ん中に温泉なんて、聞いたことがない」。広島市の歓楽街、薬研堀通りにある「音戸温泉」（中区田中町）を、東海大の新田時也専任講師（46）が29日、聞き取り調査に訪れた。何を調べに来るのか、どんな温泉なのか。記者も同行させてもらい、湯につかった。（山下奈緒子）

音戸温泉について、吉村昌峰さん（高校25回）（右）から話を聞く新田時也さん（高校34回）＝広島市中区田中町の音戸温泉

湧く興味

繁華街　魅力の源は？

平和大通りから薬研堀通りを北へ約80メートル進むと、６階建てのビルに「音戸温泉」の看板が見えた。地下一階はパブ、１階にお好み焼き店、２、３階に温泉施設がある。

新田さんは静岡県在住だが、出身は広島市。日本温泉地域学会役員で、観光振興と温泉について研究してきた。街のど真ん中にある音戸温泉に関心があり、由来や地域との関わりを調べに来た。春の学会で結果を発表するという。

音戸温泉は1959年に故・吉村芳量（よしかず）さんが開業した。現在は長男の昌峰さん（56）が後を継いでいる。

昌峰さんによると、店名は、出身地の音戸町（現・呉市）にちなんだ。当初は水道水を使った銭湯だった。72年から隣地で採掘を始め、84年、地下850メートルで温泉を掘り当てた。広島は火山がなく温泉が出ないと言われていたが、「マグマに向かって掘れば必ず出てくる」というのが芳量さんの信念。自腹で採掘したため、資金が尽きて中断することも度々。近所の人に「バカじゃないか」と言われながら掘り続けたという。

入浴料は大人400円。一般の銭湯と同じだ。泉質はナトリウム塩化物泉で、筋肉痛や関節痛、疲労回復などに効くという。20度の源泉を沸かす。約270平方メートルの館内には、受付と自動販売機があるくらいで、食事はできない。

新田さんが「もっとサービスしてお金を取らないんですか」と尋ねると、「400円ぐらいが、気を使わんで楽。文句を言う人は来るなと言っている」と昌峰さん。

サービスはないが、「つえをついていた老人が、帰る時につえを忘れた」こともあるという湯を求め、日に150人は集う。午後１時前の開店を待っていた南区の高木猛さん（71）は「ここの温泉はワシにとって楽」。週に２、３回入りにくるという。

客は減少傾向だ。午前８時まで開けていたころは、風呂で寝込む客が多く、「起こすのが大変だった」と昌峰さん。採算が悪いので、昨夏から午前１時までにした。近くの飲食店やホストクラブの従業員らが仕事帰りなどに汗を流すという。

新田さんによると、多くの温泉は、山や川など自然の中での憩いを売りにして、サービスで付加価値をつけるのが常という。「最近の温泉はおもてなしに重点を置き、客を甘やかし過ぎていると思うことがあるが、ここは一切ない」と新田さんは驚く。「非日常を売りにするのではなく、日常の付き合いの延長上に温泉があるという新しい発見を学会で紹介したい」と意気込んでいた。

取材後、記者も湯につかった。湯はぬるめ。脱衣所でお年寄りに「あなたと私、服の趣味が合うわね」と話しかけられ、会話が始まった。